



日本漫画界の巨匠・ちばてつや先生に聞く 戦争では、みんなが犠牲者 —戦後八十年に寄せて—

今年は戦後80年という節目の年にあたり、改めて歴史の真実と教訓を認識し、戦争の悲惨さと平和の大切さを再確認したいと思います。二度と戦争を起こさないために、皆さまのお力を合わせ、共に努力していくことが必要です。特に、戦争経験者が自らの体験を戦争未経験者に伝えることが、非常に重要だと考えております。

今回、著名漫画家のちばてつや先生から、幼少期に中国で終戦を迎えた当時の思い出など、数々の貴重なお話を伺うことができました。

私は1939年に東京で生まれましたが、その年、家族とともに中国の瀋陽（当時は「奉天」と呼ばれていました）へ渡り、幼少期をそこで過ごしました。当時は戦争のさなかで、父は瀋陽にある印刷会社に勤めており、私たち一家はその社宅で生活していました。

私は1945年、沈陽で終戦を迎えました。そして翌年の1946年、日本へ引き揚げました。当時、私はまだ7歳の幼い子どもでした。

その後、私は瀋陽を何度も訪れる機会がありました。最初に訪れたのは、日中国交回復の翌年である1973年でした。当時は、父が勤めていた印刷会社も、私たち家族が住んでいた社宅も、ほとんど当時のまま残っていました。

最初はなかなか敷地内に入れてもらえなかったのですが、同行していた父が一生懸命に交渉し、「ここで働いていて、この社宅に家族みんなで住んでいたのです」と説明すると、ようやく中に入ることができました。

社宅には私たち家族のほかにもさまざまな方々が住んでおり、皆とても親切でした。父には中国に多くの恩人や友人がいて、再会を願って探したのですが、その時は会うことができませんでした。



ちばてつや先生

その後も何度か瀋陽を訪れました。回数ははっきり覚えていませんが、少年時代にお世話になった方々にどうしても会いたくて、テレビ番組の企画で訪れた際には、最終日に恩人の御家族にお会いできました。

しかし残念ながら、私達がお世話になった方はすでに亡くなっていました。

最後に中国を訪れたのは、新型コロナウイルスが世界的に拡大する3年ほど前だったと思います。その時は、大連に住む中国の友人に会いに行き、友人がさまざまな美味しいお店に連れて行ってくれました。中国はどこへ行っても料理が本当に美味しいですね。

久しぶりに訪れた瀋陽は、私の記憶にある街とはまるで別世界のようにでした。ものすごく大きく発展し、ビルが立ち並ぶ大都会となっていて、本当に驚きました。

私が幼い頃の瀋陽では、街中を自転車^{クーリー}で移動する人が多く、労働者たちは三角の苦力帽をかぶり、黒や茶色といった地味な服を着て、真っ黒になるまで働いていました。

しかし、近年の瀋陽ではそうした光景はほとんど見られず、人々は皆とてもおしゃれになり、街全体が大きく変貌を遂げています。

もちろん、地方や郊外に行けば昔ながらの雰囲気や人々の暮らしが残っていますが、都市部は驚くほどのスピードで近代化し、かつての面影を探すのが難しいほどの大都会になっていました。

中国に関して、特に印象に残っているエピソードを一つ挙げたいと思います。

戦後70年を迎えた頃、戦争を経験した日本の漫画家たちが、中国での終戦当時の思い出を漫画に描く「私の八月十五日展」という展覧会が日本国内で開催され、私も一般財団法人日本漫画事務局八月十五日の会の会員として参加いたしました。

展覧会は大変好評で、その反響を受けて「ぜひ中国でも開催したい」という声が上がリ、現地の美術館などと交渉を重ねた結果、中国での展覧会開催が実現しました。

すると、中国の小学生や中学生といった若い子どもたちが、たくさん展覧会を訪れてくれました。

展示されていた絵の中には、日本人が戦争による引き揚げの過程で飢えに苦しみ、命を落としたりする、つらい場面も多く描かれていました。そうした絵を目にした中国の子どもたちは、「日本人も戦争でこんなに苦しい思いをしたのか」と驚いていました。

日本人とは中国へ来て好き勝手の事や悪い事ばかりした鬼のような民族だと教えられていたからです。

もちろん、日本人は戦争中に中国の人々に多大な迷惑をかけ、甚大な被害を与えました。しかし一方で、日本

人自身もまた戦争によって大きな苦しみと悲しみを味わいました。

中国の子どもたちが、そうした日本人のつらい体験に触れて驚き、理解を深めようとしている姿を見て、私は強く心を打たれました。

子どもたちに展覧会を見てもらい、直接話ができたことは、本当に貴重で、嬉しい経験でした。

やはり、戦争は誰にとっても苦しいものです。戦争に「勝者」はいません。

加害者も被害者も、結局は皆が犠牲者となります。勝ち負けではなく、戦争は人々の心と生活を深く傷つけるものです。

私はこれまで、漫画という表現を通じて、さまざまな角度から社会に寄り添ってきました。

今年、戦後80周年という節目を迎えるにあたり、私は改めて、日中両国の未来を担う子どもたちに、戦争の愚かさや、仲良く共に生きることの大切さを伝えたいと思っています。

展覧会で出会った中国の子どもたちの目は、みな生き生きとしていて、とても天真爛漫でした。彼らと楽しく語り合う中で、私自身も中国の素晴らしいところをたくさん学ぶことができました。

私は心から願っています。日中両国の子どもたちが、お互いの良いところを認め合い、さらに仲良くなってほしいと。

戦争で傷つけ合うのではなく、大人になってからも互いの文化を尊重し、称え合い、助け合える良い関係を築き、良き友達でいてほしいのです。

そして、日中両国の人々が、歴史を鑑とし、手を携えて未来を切り開いてほしいと心の底から思っています。

ちばてつや (ちば・てつや)

1939年(昭和14年)1月11日、東京・築地の聖路加病院に生まれる。同年11月に家族とともに朝鮮半島を経て、1941年1月に旧満州・奉天(現・中国瀋陽)へ渡る。1945年に終戦を迎え、翌1946年に中国から引き揚げ。

1950年、「漫画クラブ」に参加。1956年、単行本作品でプロデビューを果たす。1958年には『ママのバイオリン』で雑誌連載を開始し、1961年『ちかいの魔球』で週刊少年誌にデビュー。

代表作として、『1・2・3と4・5・ロク』『ユキの太陽』『紫電改のタカ』『ハリスの旋風』『みそっかす』『あしたのジョー』『おれは鉄兵』『あした天気になあれ』『のたり松太郎』など多数のヒット作を手がける。

現在、公益社団法人日本漫画家協会会長を務め、2025年4月より中友会特別顧問に就任。



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

日本と中国の人々がお互いにより 親近感を抱く未来へ

俳優 矢野 浩二



2018年、「天天向上」10周年を迎えた時の写真（本人提供）

私は2000年に中国のドラマ『永遠の恋人』の撮影で、最初に中国に行きました。当時は中国語もできず、日本との撮影方法の違いにも戸惑いましたが、通訳の方に「入郷随俗（郷に入っては郷に従え）」だ、と言われ気が楽になりました。

撮影の3カ月間、撮影スタッフの皆さんはとても親切で、私にロケ弁の中身について説明してくれたり、簡単な中国語を教えてくれたりして、「中国に来て活動すれば、きっとスターになれるよ」と言ってくれました。

中国で活動できるならやってみようと思決意して、翌年2001年に単身中国にやってきました。それから現在までずっと中国で俳優として活動しています。2001年に出演したドラマが放映され、評判はよかったそうですが、それほど反響がなく少しがっかりしました。外国にいて寂しさも感じましたが、中国人の友人たちが支えてくれたおかげで、困難を乗り越えて努力を続けることができました。

中国語に自信がついてきたのは2006年、フェニックステレビのバラエティー番組に出演した頃です。その出

演後、湖南テレビでバラエティー番組のオファーが入ってきました。湖南の人々はとても思いやりが深いことが印象的でした。普段番組のメンバーはバラバラに色々な場所で仕事をしているのですが、彼らはとても仲間意識が強く、メンバーの誰かの誕生日などには、日付が変わる12時にお祝いのメールを入れるなど、温かさを感じました。

中国には「好客^{ハオケ}」という文化があります。言ってみればお客さんに親切、という意味ですが、それをとても感じます。外の人を非常に歓迎してくれるんですね。中国語が話せないと分かっていても、簡単な言葉でコミュニケーションを取ってくれる。例えばロケ弁の内容を一生懸命簡単な中国語で説明してくれる。

またその大らかな姿勢は今でも感じます。それは実際に来てみればとてもよく感じられるものだと思います。中国人のウェルカム精神を感じるんですね。自分は中国に来て、活動範囲が広がりました。何より気持ちで通じ合えることが大事だと思います。喋れないけれど、温かさを感じるんですね。

長年中国で活動するなかで感じるのは、中国人は情に厚く、誕生日も重視するということです。2002年の誕生日について強く印象に残っているのは、部屋でテレビを見ていると突然友人から連絡があり、批判されたことです。というのは、私の誕生日は1月21日でしたが、思い出した時にはすでに25日になっていました。私は自分の誕生日のことを特に気にかけていなかったのです（以前、日本で8年間付き人をしていたので、365日・24時間いつも忙しい生活に慣れていました）。それから友人は私を食事に連れ出し、彼の友人たち20人と一緒に私のために誕生パーティーを開いてくれました。今思い出しても胸が熱くなります。一般的に日本人は少しシャイで人に迷惑をかけないように努めているところがありま

すが、中国人は情に厚く親切で、共感の心に富んでいると思います。

日本と中国は近い国で、大阪と上海を始め友好都市も数多くあります。日本と中国は、交流していかなくてはならない関係だと思っています。絆をつくっていかなくてはならない。例えば中国には年々日本料理店が増えています。中国の人々は健康を重視していて、日本食に対する興味も強い。そういった共通に享受できる関係性が大事なのではないのでしょうか。

中国は本当に大きな国です。私はエンターテインメントの分野で活動していますが、様々な分野において、まだまだ可能性のある国だと思っています。変化のスピードも速く、もっともっと日本の若者に中国へ入ってきてほしいと思います。そのためには自分たちがより多くの情報を発信していかなくてはならないと思っています。

今年（この原稿が書かれた2022年）は日中国交正常化50周年に当たります。日中両国の人々には、皆がそれぞれ分かち合えるテーマがいろいろあると思います。日本のアニメやグルメなど、共に分かち合えること、お互いが共感できるものがあることが大事だと思います。

文化やエンターテインメントを通して、日中両国の人々

とともに喜び、生活を楽しんでほしいと願っています。昨今いろいろと暗いニュースなど多い中、日中の皆さんに共に分かち合える興味深い話題を提供できるよう、様々な形での活動を行っていきたくて考えています。

私が中国で受け入れられた理由は、身近な友人や隣のお兄さんのような親近感があったからではないかと思っています。人は身近な存在に対して自然に親近感を抱くようになります。日本と中国の人々の間もお互いの存在を近く感じて、より親近感を抱くようになってほしいと願っています。私は中国と日本で活動する一人の俳優に過ぎませんが、これからも様々な機会を通じて、日中両国の皆さんに平和と友好の種を届けていきたいと思っています。

矢野 浩二（やの こうじ）

1970年1月21日大阪府生まれ。2000年に中国のドラマ『永遠の恋人』の撮影で北京に滞在、翌年2001年から中国で中国語を学びながら活動を開始。ドラマや映画に多数出演し、「中国で最も有名な日本人俳優」となる。『環球時報』主催の「2010 Awards of the year」で「最優秀外国人俳優賞」を日本人として初めて受賞。日中交流への貢献により2015年に外務大臣表彰を受賞。現在は中国と日本で幅広く活動を続け、日中交流の架け橋となっている。SNSでも積極的に発信を続け、中国のSNS総フォロワー数は約2,000万人。

「私の中国物語」その②

多世代交流を育む広場

大学教員 横山 明子

外国人教師として中国に赴任して12年が経った。中国に来て以来、興味関心を持っていることの一つに広場ダンスがある。2010年、かつて勤めていた大学内で初めて広場ダンスを見た。早朝から大音量で軽快な音楽が流れ、その音楽に合わせて踊っている方々がいた。それは朝8時頃から始まり、ダンスサークルではなく、近隣住民の集まりであるかのように見えた。遠くからその様子を見ているだけの人もいたが、ダンス好きであることが暗黙の参加条件のようだった。誰かがスピーカーを持参し、音楽が流れ始めたらどこからともなく近隣住民が集まって来る。この「音楽が流れ始めたら」というのが、まるで目覚まし時計であるかのように、音楽が人々を行動へと移す合図であるかのように感じられた。人々に「朝が来た。動かなければ!」と思わせる音楽、それが広場ダンス特有の音楽だろう。大音量で音楽が流れる理

由も、このことから何となく理解できる。輪に入って踊るだけという、誰でも参加しやすい形式。この参加の気軽さが人々に受け入れられているのかもしれない。

ダンスと言えば「社交ダンス」、「ストリートダンス」などを思い浮かべるが、中国の広場ダンスは若者のダンスとはまったく異なり、独特な動作が多い。中高年の女性が参加しており、若者の姿は皆無に等しい。参加者は幼稚園や小学校に通う孫がいる50～70代の女性がほとんどであり、悪天候の日を除き、たいいていつも同じ場所、同じ時間帯に「広場で」ダンスが行われ、顔ぶれは日によってさまざま。中国の風物詩ともいえる広場ダンス、なぜ若者は参加しないのだろうか。若者は練習を他人に見られるのが好きではない。逆に、中高年の方々は肝が据わっており、他人の目を気にせず踊っている。また上手下手を問わず、「見せる・披露する」ことにあ

まり抵抗がないようだ。この点が若者と感覚が違ふと思われる。

若者が参加したがない理由が他にあるのだろうかという好奇心と、何事も体験あるのみという気持ちから、私は数年前、地区の広場ダンスに参加した。外国人が近隣住民の輪に入るのは勇気がいる。周りの目が気になっただけでなく、更に緊張も加わった。広場ダンス初体験である私は最後列で、最前列のリーダーの動作を見よう見まねで踊った。他の参加者は既にダンスに慣れていて、振り付けを覚えていた。私は常にワンテンポ遅れていたため、そのみっともなさで観衆の視線で、とにかく恥ずかしかった。しかし、小刻みのステップ、腕を上下左右へと動かしたり、腰を少し曲げたりするなど、動作は基本的に易しく、数回練習すれば形になりそうな覚えやすい動作が多かった。アップテンポの歌に合わせて踊る時であれば、スローテンポの歌で人々に非常に優雅な印象を与える踊りもあった。参加初日、後ろを振り返ったダンス参加者が私を見て、目を丸くしていたのを今でもはっきりと覚えている。その方は私を見て「広場ダンスに参加するような年齢ではない」と感じたのだろう。私はそれを百も承知で敢えて参加したのだ。その方が私をダンス参加者に紹介してくれて、私は中高年の知り合いが非常に増えた。まさかこんな広場で大声で自己紹介をすることになるとは思いもしなかった。中高年の方々は自分の娘と同世代の私を見て、すいぶん可愛がってくれた。「ご飯は食べたのか」「中国で困っていることはないか」など、私の生活面まで心配してくれた。自分の周りにはこんなに気に掛けてくれる人がいるという安心感で満たされ、広場ダンスを通じていろいろな話ができる知り合いができたことが嬉しかった。

日本のラジオ体操の動作は全国共通。それに対して広場ダンスは創意工夫で、踊り方は無限にある。また、小道具を使ったり、全員同じ衣装で踊ったりしている団体があるのも魅力的である。また、広場ダンスの大会も行われている。テレビで各地区の代表団体が独自の踊り方で、独自の衣装を身に纏い大会に臨んでいるのを見た。地区での楽しみの一つである広場ダンスが、徐々に勝負にこだわる広場ダンスへと変化する。たとえ大会に出場しなくても、多世代が集まり、振り付けを教え合いながら楽しく交流できる、これが広場ダンスの魅力であるのではないだろうか。

近所付き合いの希薄化が問題になっている現在、「広場」はまさに絶好の社交場だと言える。広場ダンスへの

参加がきっかけで、私は近所の八百屋や飲食店へ行くたびに「広場ダンスに参加する外国人」という名で声を掛けられるようになり、言葉の壁があっても世代が違っても楽しく交流できる広場ダンスの素晴らしさを実感した。交流の種は大小を問わず身の回りに多数存在している。それを一つずつ拾い集めれば、いつか自分にとって大きな収穫につながるに違いない。今後も多世代交流、異文化交流を楽しみ、自分の目に映った中国の魅力を多くの方に伝えていけたらと思う。



2022年の学校封鎖中、学生による広場ダンス

横山 明子（よこやま あきこ）

2010年、中国湖南省吉首大学外国語学院、2011年、吉首大学張家界学院で日本語会話や作文、日本概況の授業を担当。2014年より湖南外国語職業学院東方語言学院応用日本語科教員。

「私の中国物語」その③

『真実の中国』報道は上海支局スタッフの協力のお陰

大学名誉教授 川村 範行

私は1995年6月から1998年6月まで、中日新聞・東京新聞の上海支局長として上海に駐在した。鄧小平氏の南巡講話により改革開放の加速が指示され、浦東開発が本格化して上海経済が上昇を始めた時期である。

当時の上海では、「一年変化 三年大変化」という言葉が使われた。上海の街を歩くと、毎日どこかで新しいビル建設工事が始まっていた。1年どころか1カ月で街の姿が変貌を遂げていた。市民の生活や意識も大きく変化した。計画経済から市場経済への急速な変化に伴い、発生した格差問題なども顕著になった。

こうした中国・上海の実情をありのままに日本の読者に伝えようと取材に取り組んだ。支局の助手章さん、運転手孫さんが献身的に取材をバックアップしてくれた。現地スタッフのお陰で、3年間取材に専念し、「真実の中国」報道を実現することが出来た。

私の中国報道の代表例として、連載企画「流行語に見る 上海最新事情」を挙げる。当時、日本国内では、中国人はいまだに人民服を着ていて、社会も遅れているというイメージが残っていた。私は日々発展する上海を目の当たりにして、社会と市民生活の変貌ぶりを日本人たちに知ってもらおうと考えた。

着任から2カ月後の1995年8月に6回連載記事を掲載した。各回のタイトルと要旨を紹介する。



上海支局助手宅で助手家族と（左から2人目が私、右隣が妻）

- (1)油水多? (もうかりまっか) 「上海料理の味は脂っこい」の原意から、商売が順調かどうかの意味に使われるようになった。上海一的美食街（グルメ街）で羽振りのいい転職組に取材し、景気の良い街の実態を記事で伝えた。
- (2)套牢了 (行き詰まる) 外套をかぶって顔が出せない原意から、株や離婚などで行き詰まってどうしようもない意。証券会社を取材し、株価に一喜一憂する個人株主の声を聞いた。
- (3)丁克 (子供のない共働き夫婦) ディンクスの発音の類似する漢字を当てた。若夫婦に取材し、仕事を続けるため子供が持てないという本音を紹介した。
- (4)跳桶 (転職する) 馬が飼い葉桶に飛び込むの意から。職を求める若者と求人企業の求職・求人の場として登場して間もない「上海人材市場」を取材。
- (5)淘浆糊 (あいまい模糊) 糊をかき回す意から。市場経済の推進に伴い競争やノルマがきつくなり、職場や家庭のストレスをユーモア込めて柔軟に表現する上海人の思考方法に焦点を当てた。
- (6)休閒 (レジャー) 暇でぶらぶらする意。週休2日制の導入で市民の間でレジャーブームが広がり始めた様子を紹介した。

翌年も1996年8月に6回連載記事を掲載した。

- (1)擦边球 (すれすれのやり方)
- (2)球迷 (サッカーファン)
- (3)候鳥 (留学Uターン組)
- (4)包装 (装う、美容等)
- (5)快餐 (ファストフード)
- (6)搞大 (スケールアップ)

3年目の1997年8月にも連載記事5回を掲載した。

- (1)超市 (スーパーマーケット)
- (2)下岗 (レイ・オフ)
- (3)主题公园 (テーマパーク)
- (4)持卡族 (カード族)
- (5)接轨 (国際社会との連結等)

以上の連載記事は先ず、支局助手の章さんに、市民がよく使う流行語をピックアップしてもらい、その流行語を具体的に紹介するのに適切な場所・場面を探して、取材アポの交渉をしてもらった。次に、取材現場では主に章さんが取材相手に上海語でやりとりして、あとで通訳してもらった。本音を聞き出すには、中国語の標準語ではなくて、上海の人たちが日常生活で使っている上海語の方が、親近感をもってもらえるからである。

支局専用車の運転手孫さんは上海の細かい路地にまで精通しており、正確に取材現場へたどり着いてくれた。上海以外の無錫や蘇州までも安全運転で往復してくれた。孫さんとの車内の雑談から庶民の考え方を知り、中国理解の助けにもなった。

様々な取材現場に足を運び、社会の変化や市民の暮らしぶりを皮膚感覚で知ることが出来た。毎回、新しい出会いがあり、新しいことを知ることが出来て、わくわくしながら取材をした。

上海駐在中に広い中国の各地を精力的に取材して回り、中国が発展途上国から経済大国へと向かう途中段階の姿を見聞することができた。「旧い上海（中国）」と「新しい上海（中国）」の両面を理解することができたことは、

その後の私の活動に大いに役立った。

帰国後、私は新聞社のデスクや論説委員として中国報道に携わった。その後、2011年から10年間、名古屋外国語大学で現代中国論や日中関係論の研究・教育に取り組んだ。また、日中両国大学生の相互理解を目指し、企画・実行委員長として2015年から2019年まで毎年、日本と中国で交互に日中大学生討論会を開催した。2004年からはジャーナリスト訪中団団長としてほぼ毎年訪中し、社会科学院日本研究所や外交部などとの定期交流を2019年まで続けた。

私がこのような活動を実践することができたのは、上海駐在中に中国の実情を幅広く取材し、深く理解したことが基礎となっている。支局スタッフや中国の友人に対し、深く感謝している。

川村 範行（かわむら のりゆき）

岐阜県出身。早稲田大学政治経済学部卒業後、中日新聞社入社。上海支局長として中国駐在（1995～1998年）、帰国後、論説委員等歴任。その後、名古屋外国語大学で10年間、日中関係論、現代中国論の研究・教育に従事。日中大学生討論会の企画委員長として2015年から連続5年、日中両国で同討論会を交互に開催。日本ジャーナリスト訪中団団長として2004年から2019年まで、ほぼ毎年訪中。中国の大学、シンクタンクなどと交流を続けてきた。

「私の中国物語」その④

継往開来 一日中交流の『証』に誓った思い

公務員 荻野 大

「お待たせしました。やっと来ることができました」

2021年秋、湖南省湘西州吉首市大興村という山村で、目の前にある立派な体躯の石碑を見上げ、深くお辞儀をした。滋賀県と湖南省との友好交流の「証」であるこの石碑は、長年風雨に晒されたためか、全体的に変色し所々亀裂もある。しかし刻まれた碑文ははっきりと読める。

「この森は日本国滋賀県民と中国湖南省民の友好の証として造成を行ったものです……」

その一文字一文字には多くの人々の熱い思いが込められているのだ。その瞬間、先人の思いを現代に引き継ぐことができたという安堵感から胸が熱くなった。

滋賀県と湖南省は、琵琶湖と洞庭湖という両国を代表する湖を有することが縁となり、1983年に友好提携した。文化交流や青少年交流でお互いを知ることから始まり、



植林事業の「生き証人」である石碑との対面を果たした瞬間

その後環境保全、経済、観光など幅広い分野での交流へと深化、発展している。

私にとっての湖南省は第二の故郷。

2010年、仕事で初めて省都長沙市を訪れた時に開放的な湖南人と妙に気が合い、街の熱気や風景の美しさ、辣椒の効いた湖南料理の美味さに魅了された。その経験をきっかけに中国語を習い始め、2019年には念願が叶い滋賀県の事務所立ち上げの命を受け、湖南省駐在となった。

駐在して丸2年が過ぎた2021年夏のこと。資料では見かけるが実物を見たことがない石碑の写真が頭から離れなくなった。その石碑は風格があり、見るからに両県省の交流上重要なものに思えたからだ。湖南省内の主な場所は行き尽くしているはずなのに、その石碑の話を誰からも聞かないというのはどうもおかしい。皆この石碑のことを忘れていないのではないか。

過去の記録を遡っても手掛かりはなく前任者も知らないと言う。「今何とかしないと永遠に忘れ去られるかもしれない！」と直感的に思った。

幸い、滋賀県国際協会と湖南省人民対外友好協会の御協力により次のことが分かった。

この石碑は2003年に大興村で始まった植林事業を記念して建てられたもので、今も現地にあること。その事業は日中双方が資金を出し合ったプロジェクトであったこと。6年に及ぶ工期中、滋賀県民のべ200人以上が訪湘し、地元民のべ8万人と手を携えて448ヘクタールの山に約150万株の苗木を植えたこと。現地は石灰地質で樹木が根付きにくい上に、乱伐により荒廃していたため、滋賀県庁の林業職員が10回以上も訪れて技術指導を行ったこと——初めて知る事実だった。やはりこの石碑は両県省友好交流の象徴だったのだ！

ただ、残念なことに2009年の事業完了後は滋賀県からの訪問はなく、交流が途切れていることも分かった。事業に携わった人々が知ったらきっと残念に思うだろう。私は使命感にかられ、居ても立ってもいられず現地に向かった。

長沙市から大興村へ行くには、今は高速鉄道や高速道路を使って半日弱の行程だが、当時は丸一日以上も悪路を進んでたどり着ける「陸の孤島」であった。そのような大変な思いをして多くの滋賀県民がはるばるやって来ていたのだ。

現地に着くと地元政府の王さんが出迎えてくれた。何と、王さんは当時の担当者で、久々の滋賀県から

の訪問者を大歓迎してくれた。

冒頭で紹介した石碑との対面を終え周囲を見渡すと、湘西らしい緑水青山の美しい風景が広がっていることに気付いた。かつて辺り一帯荒廃していたと言われても全く信じられない。

王さんによると、植林前は山からの土砂で川の水は水源として利用できなかったそうだ。植林後は森林が土砂流出防止や水源涵養の役割を果たすことで水質が劇的に改善し、下流の吉首市民約三十万人も恩恵を受けているという。

「滋賀県民の環境に対する意識と湖南省に対する思いの深さ、友情は忘れない。地元では今でも『滋賀県のおかげで湘西の禿山は緑の服を着ることができた』と語り継がれている」と王さんは朴訥と語った。

湘西の大地に両県省民の手で植えた苗木が根を張り、森に成長して地元民の役に立っていることを知り、また胸が熱くなった。

「Iさんは元気か？ 彼は何度も来てくれてよく杯を酌み交わしたなあ」と王さんは目を細めた。知っている県庁の先輩の名だった。往時はこの地で国境や言葉の壁を越えた人間ドラマが繰り返されてきたのだ。静かに佇んでいる友好交流の「証」を前に、「継往開来（先人の業績を受継ぎ将来の発展に道を開く）」という言葉思い起こした。

帰り際、現地の方が森や石碑を守っていてくれることに感謝するとともに、交流が途切れてしまっていることを詫言。王さんには再訪を約束し固く握手を交わした。その時の彼の手の温もりは今も忘れられない。

植林を通じた人間ドラマに再び光を当てて今の世に伝えたい。

2022年は日中国交正常化50周年、2023年には両県省友好提携40周年を迎えた。重要な節目の年に湖南省に駐在させていただけたことに感謝するとともに、現代の新しい日中地方間交流モデルを作り上げることを誓ったのだった。

荻野 大 (おぎの すぐる)

日中国交正常化の記念の年である1972年生まれ。大学卒業後滋賀県庁に入庁。1997年に近畿青年洋上大学の一員として初めて訪中し青少年交流活動に参加。2011年に初めて湖南省を訪問したのを機に中国語学習を始め、湖南省との交流活動にも参加するようになる。2019年に滋賀県の現地事務所立ち上げの命を受け、初代所長として湖南省長沙市に赴任する。現在も日々両県省の友好交流発展のために活動している。